

特集「環境過敏症患者の発症予防をめざして」にあたって

北條祥子^{1,2,3)}

環境過敏症分科会世話人

¹⁾東北大学大学院歯学研究科, ²⁾尚絅学院大学, ³⁾生活環境と健康研究会

1. はじめに

環境過敏症(環境不耐症)とは生活環境中の様々な要因により、多臓器に様々な不定愁訴(例：頭痛、めまい、全身倦怠感、吐き気、睡眠障害、呼吸困難、咳、動悸、腹痛、下痢、四肢の脱力や痛み、思考力・集中力低下、うつ状態、意識消失など)を訴える健康障害と考えられている。代表例は、シックハウス症候群(sick house syndrome: SHS)、化学物質過敏症(multiple chemical sensitivity: MCS)、電磁過敏症(electromagnetic hypersensitivity: EHS)であり、アレルギー疾患と密接な関係があると考えられているが、科学的に未解明な部分が多い¹⁾。

しかし、近年、先進国を中心に環境過敏症患者の急増が報告され始めている^{1,2)}。例えば、Steinmanら²⁾はオンラインで2016年に無作為抽出した米国の成人1,137名を対象とした調査を行い、“10年前に同一方法で実施した調査結果と比較し、①MCSと診断された患者は成人の12.8%、自己申告化学物質過敏患者は25.9%存在。②10年前と比較して、MCS患者と診断された患者は3倍以上、自己申告化学物質過敏患者は2倍以上に増加していた。③MCSと診断された患者の86.2%が芳香剤で片頭痛を発現した。④MCS患者の71.0%が喘息を合併していた。⑤MCS患者の60.7%は、職場の香害のために、過去1年間に、休職したり、重症者は失職をしていた。以上の結果から、芳香のある製品の曝露を減らすことは、国民の健康障害予防のためにも有効だと考える。”と結論している。

日本においても、永吉ら³⁾は、上越市立の全小学校児童14,024名を対象とした調査を行い、“①小学1年生から中学3年生へ学年が進むに伴い、MCS様症状を示す児童・生徒の割合が増加傾向にあった。②小学生全体のMCS様症状を示す児童の割合は、今回調査した小学生の方が5年前に比べて大きくなっている。③小学3年生から中学3年生までのMCS様症状

を示す児童・生徒はMCS様症状を示していない児童・生徒より就寝時刻が遅かった。”と、報告しており、日本でも、MCS患者が急増する可能性が示唆される。しかし、日本は諸外国と比べ、環境過敏症に関する一般人の認知度が低いと指摘されており、早急に、その発症予防対策法を検討すべき時期にきていると考える。

環境過敏症は、生活習慣病やアレルギー疾患と同様に、生活環境中の様々な環境要因、遺伝要因、身体要因が複雑に絡んで発症すると推定される。したがって、このような健康障害の病態解明や予防対策は、患者を抱える国々の研究者が、自国の患者に関する実態調査を行い、科学的なエビデンスの収集・集積・整理し、情報交換・共有しながら試行錯誤で検討する以外ない。そして、その検討結果を一般市民にも分かりやすい形で提示していくことが大事であると考えられる。

2. 環境過敏症分科会設立趣旨

室内環境学会は正会員400名未満の、比較的小規模の学会であるが、幅広い専門分野(臨床医学、基礎医学、化学、工学、建築学、生物学、環境社会学など)の研究者・技術者の集まりである。環境過敏症のような健康障害の予防対策法を検討するには最適な学会の一つと考え、2017年11月に、環境過敏症分科会を設立した。本特集は、環境過敏症分科会の活動の一つとして企画したものである。

3. 本特集の目的と内容

本特集では、幅広い専門分野の研究者に、「環境過敏症患者の発症予防をめざして」という共通テーマでご執筆いただくことにした。第1回の本号では、5名のメンバーにご執筆いただいた。すなわち、最初に、環境リスク論がご専門の東先生(近畿大学)に、総論的な立場から、“健康リスクの立場からみた環

境過敏症の予防について”をご執筆いただいた。次に、生物物理学が専門の宮田英威先生(東北大学)に、電磁過敏症に関する基礎知識として“生物の磁場感受性と電磁過敏症”をご執筆いただいた。次いで、患者を診察している医師の立場からは、加藤貴彦先生(熊本大学)に、“産業衛生における化学物質過敏症の現状と課題”を、そして水城まさみ先生((独)国立盛岡医療センター)に、“労働現場で発症した化学物質過敏症を廻る最近の動向”についてご執筆いただいた。最後に、患者の立場から、瀬川忍先生(金沢大学)に、“患者から見た化学物質過敏症の病態”についてご執筆いただいた。今後とも、随時、いろいろな専門分野の立場から、“環境過敏症患者の発症要因やその予防対策の展望について”ご執筆いただきたいと考えている。

引用文献

- 1) 北條祥子, 水越厚史: 疫学調査からみた日本の環境過敏症患者の実態と今後の展望, *臨床環境医学*, 27, 83-98 (2018).
- 2) Steinemann A.: National prevalence and effects of multiple chemical sensitivities, *J. Occup. Environ. Med.*, 60, e152-e156 (2018). [Epub: Jan. 12, 2018] doi: 10.1097/JOM.0000000000001272
- 3) 永吉雅人, 杉田収, 橋本明浩, 小林恵子, 平澤則子, 飯吉令枝, 曾田耕一, 室岡耕次, 坂本ちか子: 児童・生徒 (6~15才) の化学物質過敏症様症状に関するアンケート再調査, *室内環境*, 16, 97-103 (2013).